

地域コミュニティの 防災力

連載 第27回

仮設住宅とコミュニティ～その2～



常葉大学大学院 環境防災研究科 教授
重川 希志依

1. 公助に依存しない生活再建

前号で、東日本大震災により被害を受けた被災者の方たちが生活する二つのタイプの仮設住宅と、そのうち民間の賃貸住宅の空室を活用した借上げ仮設住宅に居住する方たちの生活再建についてご紹介しました。個々の家族の生活再建に、コミュニティの力、互助・共助の力が重要であることはこれまでたびたび指摘されてきましたし、私自身、そのことに異を唱えるつもりではありません。しかし借上げ仮設住宅居住者の中には、公助をあてにせず、自助努力を重ねて生活再建に取り組んできた被災者の方たちが少なからず存在することも明らかとなっています。

『行政の支援の遅れが被災地の復興の遅れだというのは、違うのではないかと私は思うのね。本来であれば、文句を言わずに行政にすっかりお任せすれば一番早いです。遅らせているのは被災者なのか、周りに取り巻くいろいろなのがあって、それがせっかく解決しそうな問題をま



写真1 震災から1ヶ月後の関東地区

た蒸し起こすようなことをやって、混乱を起こして遅くしているような気がする。私たちが、いろいろなNPOとか何かでも入ってきたりする。でも、よくよく見ると後ろに必ず何かがいる。特に利害関係が必ず付いてくる。そういう人たちが入ってくるようになって、それで、あれがこうだと言われて教えられると、「そうだ、そうだ」という人たちが出てきてしまうよね。今までの人生は終わりなのだよと覚悟して、今までの生活はリセットして次だよとしないと、

地域コミュニティの 防災力 重川 希志依

事は早く進まないからね。』(50代男性、自宅は津波で流出)

行政の支援ありきが前提で語られてきた被災者の生活再建支援のための様々な公的施策や様々な善意の支援活動が、実は生活再建の足を引っ張っている側面があることを語る被災者もいらっしゃるのです。



写真2 関上の港

2. 地縁が消える

私たちがこれまで続けてきた被災者の方たちに対する聞き取り調査の対象地域の一つに名取市^{ゆりあげ}関上地域があります。赤貝などの漁業が盛んだったこの地域は浜独特の習慣・風習があり、地域コミュニティの絆は非常に濃密なものでした。ところがインタビューを続けていく中で、不思議な事に気づいたのです。それは、借上げ仮設住宅で暮らす、あるいは暮らした経験を持つ人たちが震災後の生活再建過程を語る中で、関上で暮らしていた時のご近所付き合いのあった方たちの話がほとんど出てこなかったことです。

『新聞やテレビで関上をやるというのは分かりますから、関上がここまでなったのかという感じで。あと、1カ月に1回、市役所から市政だよりが来ますから、それを見て、ここまでこうだったんだ、その後どうなるのみたいなことが

まだまだ見えないから。仮設(プレハブ仮設住宅)に入っている人がアパートに早く住めるようになればいいのかなと思ったりします。もう、ここに住んだら、ここの人たちと仲良くしなければいけないだろうと思って。ああ、関上は次となってしまいましたね。

こういう一軒家とかアパートとかにいる人は、もうコミュニケーションみたいなものは全然ないですから、その人たち自身だけでやっているから、仮設にいる人たちよりは情報がありません。私たちも全然なかったから、毎日毎日「どうしよう、どう生活していこう」みたいな感じだけでしたから。あの人、あそこでうちを建てたとかの話が出たりすると、「ああ、そう、ふーん」という感じだけなんですよね。後はもう、関上の人はどこに行ってどうしてというのは、全然分からないのです。』(60代女性、津波により自宅流出)

『関上というところに帰りたいという思いもどこかにはあるのだけど、このままでいいよと思うときもあるし。何かこう、揺れるんですよ。自分の15年をチャラにしちゃうのかという思いと、いいじゃん、今が幸せなのだからと思う自分と。町内会のつながりは、仮設にいれば、だいたい何丁目と何丁目はここの仮設ねということで入っているのでもそこにはいるのですが、結局そこから離れた人間には何もないですね。ただ、たまにスーパーとかで、「あら」と言う感じで。

ものすごい、関上って、本当に地元の、横のつながりというか、親戚も多いからかもしれないけれども、隣のうちで何しているかが分かるぐらい、密だったのですよ。だから、15年前にこちらに嫁いだときも、本当によそ者という中で。だから、ものすごい住民のつながりというのが大きいというか、強い所なので。またみんな戻

地域コミュニティの 防災力 重川 希志依

ればいいけれども、なかなかね。戻れない、戻らないというふうになっちゃうのかなと思ってはいます。こうやって住む場所が離れてしまうと、当時はすごく密でしていたコミュニケーションももうないですね。』(40代女性、津波により自宅流出)

『閉上の現地復興は多分もう無理だなという見切りをつけたのです。あれで戻るの、そこにしか戻れない人しか戻らないというようになるだろうという見切りですね。本当にコミュニティを再生するのだったら、早い時期に見切りをつけて、内陸にコミュニティを再生してほしいかなど。閉上の人たちは現場に戻りたいのではなくて、閉上の人たちの固まりでいたいという意識のほうが強いと思うのですよ。あそこでないと駄目だというのは漁業関係者や一部の人たちだけなので、そこでなければ閉上がつくれないというのがありきでは、方向が違うねと。みんなはこの人たちと一緒に、もう一回まちをつくりたいという思いの方が大きいと思うのですよ。みんなの話でそうなのです。』

昔のつながりは少しずつ消えていってきているという感じはありますね。縦でつながっていたものはなくなってはきていますね。年代を超えてつながろうという意識は地域に住んでいないとできない話で。われわれが閉上のことと言うと同級生とか、横としかつながらないので。むしろ逆に、あれをきっかけに同級生のつながりが強まったのですよ。みんな大丈夫かという話になって、みんな一回集まろうかと言って、

集まったら集まったで盛り上がるわけで、継続してやっていこうかという話になったりして、そのうちに私もこうやっていろいろ情報を出したり、震災以降の方が横ではつながっている気がしますね。同級生は同じ世代を生きてきて、昔一緒に遊んだ仲間だというのでいつまでも共有できるものが死ぬまであるのかもしれないけれど。年代が違う人は価値観を共有できないので。場所につながっていたわけだから、場所が離れるとつながる理由はなくなってくるのですよね。たまたま一緒に閉上に住んでいたというだけでもう一回集まろうと言ってもなかなかね、昔話して終わりぐらいの話で。』(50代男性、自宅は津波で流出、両親を津波で亡くす)

災害時の生活再建にとって、公的な支援策と同様に地域コミュニティの存在の重要性は広く知られています。しかし「場所につながっていたわけだから、場所が離れるとつながる理由はなくなってくるのですよね(60代男性、自宅は津波で流出)」という言葉どおり、地縁とはまさに地べたのつながりであり、地べたを離れた途端、その縁が消え去ってしまうという、当たり前であり、また意外な事実を知ることとなりました。元住んでいた場所を離れ、新たな生活を手に入れようと奮闘する人たちにとっては、それまでの地域コミュニティとのつながりは、生活再建にとって欠くべからざる重要な要素とはなっておらず、むしろ、新しい場所での地域コミュニティとの関係づくりに努力を惜しまない人たちが多いことが印象的でした。